

<書評>小田切秀雄著 『社会文学・社会主義文学研究』

首藤, 守哉

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

43

(開始ページ / Start Page)

86

(終了ページ / End Page)

87

(発行年 / Year)

1990-11-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019623>

小田切秀雄著

『社会文学・社会主義』

文学研究』

首藤 守哉

近ごろ、僕は教育相談——学校におけるカウンセリングにかかわっている。今年で四年目ののだが、人間とは実に興味深くおもしろいものだと感じさせられる場面に多く出会う。

あらゆる動作、発語には意味がある。子供の——子供とは限らない、人間そのものの動作ひとつひとつにその人間の意志と、意志にさえならない生理的な感覚があらわれているらしい。何を、どのように語るかはその存在に深くかわることなのである。さらに言うならば、沈黙にさえ意味があるのだ。そこに人間がいるかぎり。

著者小田切秀雄は本書中の「北村透谷 わたしの透谷」のなかでこう述べている。

しかし、わたしが本当に透谷に傾倒するようになったのは、学生生活を終わったところからであった。手ごわい対象をえらんで自分の力をためてみたい、と考えてわたしは透谷を自分の肉眼で再検討しようと考えた。そしてわたしは、透谷こそ実は左派自由民権運動の政治から敗退して文学の領域に自己の戦いの場所を移した《先駆者》であること、いわば《政治から文学へ》のコースの最初の打開者であること、敗北と屈折と抵抗との入り組んだ体験の中から日本近代文学の独自の芸術的発展を作り出したこと、これらのことを見出した。つまりわたしは、数年来わたし自身の歩もうとしていた道の確かな痛烈な先駆者として透谷を発見したのである。

もともと、批評が対象のもつ意味を探りあてると同時にそれを語る自分自身を展開することにおいて存在の意味を持つものであるならば、何をどのように論じたかがその論者の姿を浮かびあがらせ明らかになることになるだろう。

ここに取りあげられている二葉亭四迷、北村透谷、石川啄木、中野重治ら二十九人はまさに著者のそのような興味、関心から取り上げられ、論じられていることによって著者の姿をも映しだしているのである。そこに見られるのは、さまざまな形での近代的自我の確立とその展開、それにもとづく時代社会状況との対峙であろう。その点において、ここで取りあげられた人々は著者小田切秀雄の先行者であるといえよう。

そしてまた、「世界および日本のプロレタリア文学概観」「近代社会主義文学集」について「現代文学」についての『文戦派』の意義」と続く本書の構成は、その構成自体に意味があろう。すなわち、著者の数多い達成の中から、あえて、これらの仕事を選び出したということである。そして、この試みは著者のこれまでの仕事の「中仕切り」として位置付けることができるのではないだろうか。

最近の、特にこの一年の世界情勢、とりわけソ連を中心とする東欧社会主義国の変化は著しい。けれども、この「民主化」の動きをそのまま受け止めるには僕はあまりにも懐疑的になってしまっている。一年も前のことに

なるが、天安門事件のとき僕は仕事で山の中にいて新聞、TV等を見ることがなかった。山から戻って来て、初めて何かが起こったらしいと感じたのだった。僕は取りのけておいた新聞を繰り返して読んだけれど、事態が理解できなかった。できなかったというよりも理解したくなかったというほうがいいかもしれない。

世間ではさまざまな論者が、それぞれの立場から発言を続けている。ある論者は社会主義の終焉を語り、『社会主義』は国家資本主義の一形態にすぎない、と言う。また、別の論者は、社会主義が資本主義に負けた訳ではない、その証拠に社会主義国家の政策が資本主義国家の政策に取り入れられているではないか、と言う。

これらについて、今、将来を見越してどうなるかを結論づけることは難しいと思われるが、少なくとも現在という時間が過渡的な状況であるということは可能だろう。そして、このような時代状況であるがゆえに「社会学・社会主義文学研究」という視点での問題の整理、把握の仕方が重要になろう。著者はこう書く。

社会主義文学というのは、もちろんプロレタリア文学のすべてをもふくむけれども、それですべて終わるというものではなく、広義の社会主義の立場とその内面性にかかわるすべての文学を包括するいわばより高次な普遍的な概念である。——中略——社会主義文学ということばは、明治のいわゆる《社会主義文学》、大正初年の《労働文学》の一部、昭和初年の《プロレタリア文学》、戦後の《民主主義文学》のうち革命的部分、等のすべてをふくむことばであり、諸外国での同じ傾向の文学潮流・作品群と対応している。

まさに、先にあげた小田切秀雄の視点でこれらの社会主義文学がとらえかえされるとき、そこに「人間の顔をした社会主義」の姿が浮かびあがるのではあるまいか。

人間は多様な存在である。その人間の発するあらゆる言葉、あらゆる態度、ひいては、あらゆる存在には意味がある。社会のための、組織のための人間存在ではなく、人間のための社会、人間のための組織を作り出していくのは、やはり我々自身の問題であろう。

我々自身の中での《革命運動への革命的批判》が問い続けられなければなるまい。

わたし自身の問題としていえば、個と組織の問題についてこの本から示唆されることが多かったことを付け加えておきたい。

(勁草書房 A5判・三六〇頁)

本体価格三、七〇〇円)

▽著者〓本学名誉教授

▽評者〓一九八〇年大学院卒